長野県短期大学紀要　第50号　129-134頁　1995年12月
Journal of Nagano Prefectural College, No. 50, pp. 129-134, December 1995

接頭辞付加とゼロ派生について

西原　哲雄*

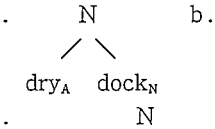
0．序

Siegel (1974) や Aronoff (1976) によって提唱された生成形態論 (Generative Morphology) はこの20年の間にさまざまな批判を受けながらも，多くの語形成 (Word Formation) に関わる現象を説明し，発展してきた。こうした研究の発展の中で，形態部門の自立性，接辞の特徴による分類・階層化，それに伴う語形成過程の順序付け (Level Ordering)，音韻論との関連性[1]などの新たな基本的概念の提案がなされてきた。さらに，Williams (1981) では，語の主要部 (Head of a Word) という概念が導入され，派生接尾辞は主要部となるが，派生接頭辞は主要部にはならないと提案された。しかしながら，この主張に対する例外であるとされてきた接頭辞 (英語の en-など) には十分な説明が与えられていなかったが，Scalise (1988) は，ゼロ派生 (Zero Derivation) を用いることによってこの問題を解決しようとした。確かにゼロ派生を用いることによって的確にこの問題を説明することができるが，例外とされる接頭辞が付加される語とそうでない語との区別について説明が明確にされていないと竝木 (1992) が指摘し，問題を提起している。本稿では，この点について，接辞と語 (基体) のそれぞれが持つ素性 ([±Latinate]) の関連性 (一致) が重要な役割をしており，従来指摘されてきた主張よりも，その関係が密接であるという観点からこの問題の解決を試みる。さらに，近年，音韻論において提案され，注目されている最適性理論 (Optimality Theory) で存在を否定され，排除の方向にある規則の順序付け (Rule Ordering) の形態部門における必要性も指摘する。[2]

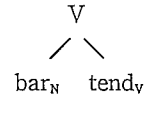
1．語の主要部

Williams (1981) は複合語の主要部をその語の右側の要素であると述べている。((1)を参照。)

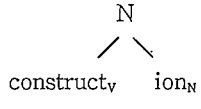
(1) a.



b.



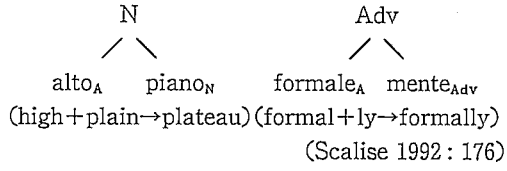
c.



(1a, b) のそれぞれの複合語及び，(1c) の派生語 (形態的複合語) の語彙範疇 (品詞) を決定しているのは，dock，tend，-ion の部分であり，このような語および接辞を語の主要部 (Head of a Word) という。Williams (1981) はこの現象を右側主要部規則 (Righthand Head Rule, RHR) と呼んでいる。この規則はその他の言語 (イタリア語，オランダ語，フランス語，日本語など) にも適用が可能であるという事が，今日までの研究で明らかにされてきている。

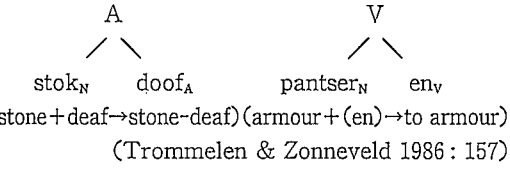
*〒380　長野市三輪8-49-7　長野県短期大学

(2) a．Italian



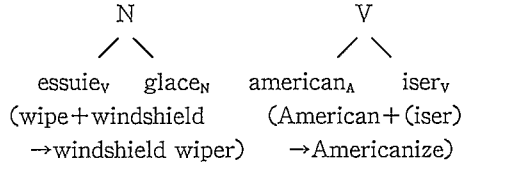
(Scalise 1992 : 176)

b．Dutch



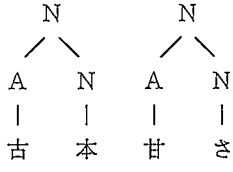
(Trommelen & Zonneveld 1986 : 157)

c．French



(Lieber 1992 : 67)

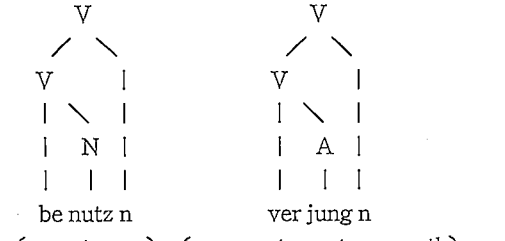
d．Japanese



(影山1993 : 21)

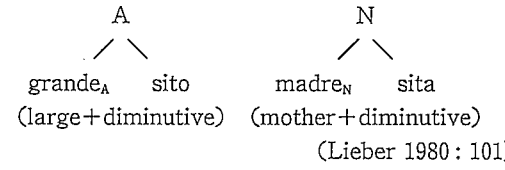
一方，Lieber (1980) などでは，(3)に見られるような，ドイツ語，スペイン語などの事例を挙げ，右側主要部規則では適切に説明ができないとして批判している。

(3) a．German



(Lieber 1980 : 97-98)

b．Spanish



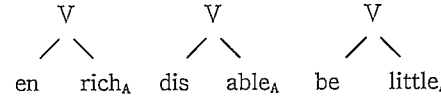
(Lieber 1980 : 101)

(3a) のドイツ語では，左側の接頭辞（ver-，be-）が派生語の語彙範疇を決定しており，(3b) のスペイン語でも，右側にある指小辞（diminutive suffix）である-sito(a) は派生語の語彙範疇には関与せずに，左側の要素が語彙範疇を決定している。これらの例は明らかに，右側主要部規則に対する反例である。

2．接頭辞付加

上述の右側主要部規則の代表的な反例としては，(3a) で見られたようなドイツ語の接頭辞のほかに，英語の接頭辞（en-，dis-，be-など）が挙げられる。((4)を参照。)

(4)



(4)では，en-，dis-，be-，が形容詞に付加されることによって派生語の語彙範疇は動詞に変化している。Williams (1981) では，ほとんどの接頭辞が語彙範疇決定能力がなく，右側主要部規則に従い接頭辞は主要部にはならないと主張されていたが，en-などは語彙範疇決定能力があるので，明らかに例外的なものとして扱われていた。この接頭辞付加について，Scalise (1988) では(5)のような主張をしている。

(5)派生接頭辞は主要部ではない。英語の接頭辞en-のようにこの概念には例外が存在するとWilliams (1981) は考えているが，これらの接頭辞について異なった分析をすることで，主要部ではないと論証できる。 (Scalise 1988 : 229-30)

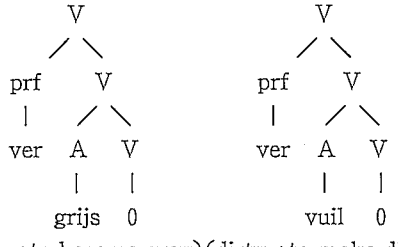
Scalise (1988) はen-などの接頭辞付加を(6)のように，ゼロ派生 (Zero Derivation) を用いることによって接頭辞は主要部ではないという主張

を支持している。

(6)(i)lexicon:　$[\text{rich}]_A$
(ii)suffixation: $[[\text{rich}]_A+0]_V$
(iii)prefixation: $[\text{en}+[[\text{rich}]_A+0]_V]_V$
(Scalise 1988 : 240)

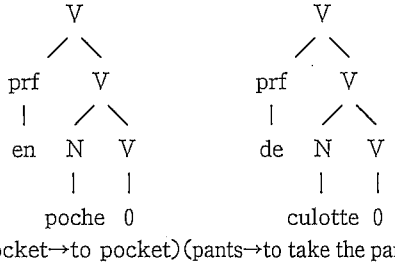
確かに，(6)のように分析すると，右側に位置するゼロ派生接尾辞(0)が主要部となり，接頭辞 en-はゼロ派生された動詞の $[[\text{rich}]_A+0]_V$ に付加され，同じ語彙範疇である動詞を派生するので右側主要部規則に違反するものではないと考えられる。また，このゼロ派生の導入はオランダ語，フランス語などにおいても(7)に見られるようなそれぞれの接頭辞付加による語の派生過程での右側主要部規則の妥当性を支持するものとなる。[3)]

(7) a. Dutch



(grey→to become grey)(dirty→to make dirty)
(Neelman & Schipper 1992 : 57-58)

b. French



(pocket→to pocket)(pants→to take the pants off)
(Lieber 1992 : 68)

さらに，be-，dis-なども同様の分析が可能である。

しかし，竝木（1992）はScalise（1988）の分析のように，ゼロ派生を導入するなら(8)のような場合にはなぜ en-がさらに付加されないのかという問題が残ると主張している。

(8)　$\text{dry}_A \rightarrow \text{dry}_V$　　$\text{clean}_A \rightarrow \text{clean}_V$

次節では，この点について分析，検討を行い，解決案を提案することにする。

3．接頭辞付加の素性情報

接辞付加に際しては，形態上の条件である形態情報が利用されることになる。形態素の素性として［±Latinate］の区別が存在しており，基体にたいしても素性が指定されなければならない場合がある。例えば，接尾辞-ness はほとんどどんな形容詞にも自由に付加されるが，-ity は［+Latinate］という素性を持つ形容詞，つまりラテン語・フランス語系の形容詞にしか付加することができず，［-Latinate］の素性の形容詞である元から英語に存在しているゲルマン語系の形容詞には付加できないということである。((9)を参照)

(9) a. clever[-Lat]+ness[-Lat]→cleverness
clever[-Lat]+ity[+Lat]→*cleverity
b. happy[-Lat]+ness[-Lat]→happiness
happy[-Lat]+ity[+Lat]→*happity

(9)からは，基体の素性指定だけではなく，接尾辞の素性も関与しており，基体と接尾辞の素性の一致（agreement）によって派生過程が説明されていることがわかる。しかし，単純に基体と接尾辞の素性一致によるものではないことは，[-Lat]の素性をもつ-ness が［+Lat］をもつ基体にも付加が可能であることから分かる。従って，-ness などの［-Lat］をもつ接辞が基体に付加される際の基体の素性指定は［-Lat]，［+Lat］であるのに対して，-ity などの［+Lat］をもつ接辞は基体の素性指定が［+Lat］の場合のみ付加が可能であると考えられる。さらに，このことは，［-Lat］をもつ-hood という接尾辞も同じ［-Lat］の素性をもつ基体だけではなく，［+Lat］をもつ priest，state などの語にも付加されていることからも支持される。((10)を参照)

(10)

接辞	基体	素性一致	接辞付加
[-Lat]	[-Lat]	+agreement	OK
[-Lat]	[+Lat]	-agreement	OK
[+Lat]	[+Lat]	+agreement	OK
[+Lat]	[-Lat]	-agreement	NO

しかし，-ness などの接辞素性［-Lat］と基体素性［+Lat］において，素性一致が行われていると考えるには問題があるが，これらの接辞については，その素性指定が行われていない空白の状態（［ ］）であると考え，接辞と基体の素性が一致しない否定条件（-agreement）がない限り，接辞付加が行われると考えると(11)のように無理のない説明となる。[4]

(11)

接辞	基体	素性一致	接辞付加
[ ]	[-Lat]	? agreement	OK
[ ]	[+Lat]	? agreement	OK
[+Lat]	[+Lat]	+agreement	OK
[+Lat]	[-Lat]	-agreement	NO

(11)のような素性一致の記述だけでは，［+Lat］の素性をもつ接頭辞 en-[5]，dis-などのふるまいを適切に説明することはできず，ゼロ派生との複雑な関連性があるように考えられる。例えば，基体素性［-Lat］を持ちゼロ派生された water_V に en-が付加されないのは素性不一致によるものだと説明できるが，［+Lat］を持った dis-は［-Lat］をもつ基体 own に付加されないはずであるが，実際には付加されている。この場合，own は動詞であり dis-が付加される前にゼロ派生は行われておらず，ゼロ派生の有無と接辞付加との間の関連性が考えられ，(12)のような，ゼロ派生と接辞付加の規則の順序付けを行うことによって問題の解決を試みることにする。[6]

(12)素性一致［? agreement］

	[+agreement]	[-agreement]	
	↓	↓	↓
ゼロ派生	(1)applicable	applicable	not applicable
	↓	↓	↓
接辞付加	(2)applicable	not applicable	applicable
	(Type-I)	(Type-II)	(Type-III)
	（合接的順序付け）	（離接的順序付け）	

素性一致に基づき，このように2種類の規則の順序付けを認めることによって，(13)に示されるように，それぞれの接頭辞の付加について適切に説明することができる。

(13) a.

	water_N[-Lat]	rich_A[+Lat]
en-[+Lat]	[-agr]	[+agr]
	↓	↓
ゼロ派生	$[[\text{water}]_N+0]_V$	$[[\text{rich}]_A+0]_V$
	↓	↓
接頭辞付加	not applicable	$[\text{en}[[\text{rich}]_A+0]_V]_V$
output	water_V(Type-II)	enrich_V(Type-I)

b.

	calm_N[+Lat]	little_A[-Lat]
be-[ ]	[? agr]	[? agr]
	↓	↓
ゼロ派生	$[[\text{calm}]_N+0]_V$	$[[\text{little}]_A+0]_V$
	↓	↓
接頭辞付加	$[\text{be}[[\text{calm}]_A+0]_V]_V$	$[\text{be}[[\text{little}]_A+0]_V]_V$
output	becalm_V(Type-I)	belittle_V(Type-I)

c.

	honor_N[+Lat]	own_V[-Lat]
dis-[+Lat]	[+agr]	[-agr]
	↓	↓
ゼロ派生	$[[\text{honor}_N]+0]_V$	not applicable
	↓	↓
接頭辞付加	$[\text{dis}[[\text{honor}_N]+0]_V]_V$	$[\text{dis}[\text{own}]_V]_V$
output	dishonor_V(Type-I)	disown_V(Type-III)

4．結 語

以上，本稿では，(13)で見られるように，接頭辞の素性と基体の素性との一致に基づき，ゼロ派生と接頭辞付加を2種類の順序付けに区別することで，右側主要部規則に違反せず，竝木（1992）で指摘された接頭辞 en-などの通常の接頭辞とは異なったふるまいを適切に説明できることを指摘した。また，近年，急速に注目されてきた音韻理論で，音韻規則を排除し，制約（constraints）を基本とした最適性理論（Optimality Theory）とは対照的に，南條（1995）が語彙後音韻部門で音韻規則の存在を支持する主張しているのと同じように，

形態部門においての規則の存在と順序付けの必要性も指摘した。[7]その他の言語における接頭辞の詳しい分析については今後の課題としたい。

注

1) 音韻構造と形態構造の相互依存関係を捉えたのはKiparsky (1982), Mohanan (1986) などで提唱された語彙音韻論 (Lexical Phonology) である。
2) 最適性理論 (Optimality Theory) について詳しくはPrince & Smolensky (1993) を参照のこと。
3) オランダ語と同じ接頭辞 ver-, be-をもつ, ドイツ語でも Lieber (1980) が示すような反例は実際は少数であり, 例えば, $[_{V}[_{V}[_{N}\text{pflanze}]_{N}+0]_{V}]_{V}$(plant → transplant), $[_{V}[_{V}[_{N}\text{leben}]_{N}+0]_{V}]_{V}$(life → give life to)などのゼロ派生による派生過程は, はるかに多く見られる。
4) 音韻論における, 不完全指定理 (Underspecification) に類似しているが, ここでは単に, [ ] の空白の状態は, [±Lat] のいずれの素性指定も行われずに, その結果, 素性一致の判断ができない状態 [?agreement] にあることを示している。また, 否定条件 [-agr] がない限り, 接辞付加が行われるのはデフォルト規則 (default rule) によるものである。
5) Jespersen (1939 : 369) は接頭辞 en-による英語の派生 (形容詞・名詞から動詞を作る) は, 本来は接尾辞-enによって行われるものが, フランス語からの類推 (enrich<enrichir(F)) によって行われていると述べている。これを支持するものとして, 接頭辞 en-は基本的には接尾辞であり, 接頭辞 en-は接尾辞-enのコピーによるものだとする主張が, Wayne et al. (1989) でなされている。
6) これらの規則の順序付けは, Chomsky & Halle (1968) で導入されたもので, 詳しくは, 今井 (1986 : 186) を参照のこと。
7) 南條 (1995) は最適性理論を完全に否定しているのではなく, 語彙部門ではその妥当性を認めており, 語彙後部門における異音レベルの音韻過程の取扱いに関して, 最適性理論の不備を指摘し, 規則の必要性を主張している。

参考文献

Aronoff, M. 1976. *Word Formation in Generative Grammar.* Cambridge, Mass. : MIT Press.

Booij, G. 1992. "Compounding in Dutch." *Rivista di Linguistica* 4, 37-59.

Chomsky, N. & M. Halle. 1968. *The Sound Pattern of English.* New York : Harper & Row.

Di Sciullo, A. M. & E. Williams. 1987. *On the Definition of Word.* Cambridge, Mass. : MIT Press.

Farkas, D. 1990. "Two Cases of Underspecification in Morphology." *Linguistic Inquiry* 21, 539-550.

Hammond, M. 1993. "On the Absence of Category-Changing Prefixes in English." *Linguistic Inquiry* 24, 562-567.

今井邦彦編. 1986.『チョムスキー小事典』東京：大修館.

Jespersen, O. 1939. "The History of a Suffix." In *Selected Writings of Otto Jespersen.* Tokyo : Senjo Publishing. 327-35.

影山太郎. 1993.『文法と語形成』東京：ひつじ書房.

Kiparsky, P. 1982. "From Cyclic Phonology to Lexical Phonology." In H. van der Hulst et al. (eds.) *The Structure of Phonological Representations Part I.* Dordrecht : Foris. 131-75.

Lieber, R. 1980. "On the Organization of the Lexicon." Ph. D. dissertation, MIT.

Lieber, R. 1992. *Deconstructing Morphology.* Chicago : The University of Chicago Press.

Mohanan, K. P. 1986. *The Theory of Lexical Phonology.* Dordrecht : D. Reidel.

Myers, S. 1984. "Zero-Derivation and Inflection." In Speas, M. & R. Sproat (eds.) *MIT Working Papers in Linguistics* 7. 53-69.

Namiki, T. 1982. "The 'Notion of aWord' and Core and Periphery Word Formation." *Studies in English Linguistics* 10, 21-41.

竝木崇康. 1985.『語形成』(新英文法選書 2) 東京：大修館.

竝木崇康. 1992.「形態論」『海外言語学情報』6号.

東京：大修館. 179-189.

南條健助. 1995.「音韻規則における異音規則の必要性について」Ms. 甲南大学.

Neelman, A. & J. Schipper. 1992. "Verbal Prefixation in Dutch: Thematic Evidence for Conversion." In Booij, G. & J. van Marle (eds.) *Yearbook of Morphology 1992.* Dordrecht: Kluwer Academic Publishers. 57-92.

西原哲雄. 1993.「語彙音韻論とロマンス借用語」『近代英語の諸相：近代英語協会10周年記念論集』東京：英潮社. 42-50.

大石 強. 1985.『形態論』(現代の英語学シリーズ 4) 東京：開拓社.

Prince, A. S. & P. Smolensky. 1993. "Optimality Theory: Constraint Interaction in Generative-Grammar." Ms. Rutger University, New Brunswick, and University of Colorado, Boulder.

Scalise, S. 1984. *Generative Morphology.* Dordrecht: Foris.

Scalise, S. 1988. "The Notion of 'Head' in Morphology " In Booij, G. & J. van Marle (eds.) *Yearbook of Morphology 1988.* Dodrecht: Foris. 247-58.

Scalise, S. 1992. "Compounding in Italian." *Rivista di Linguistica* 4, 175-99.

Selkirk, E. O. 1982. *The Syntax of Words.* Cambridge, Mass.: MIT Press.

島村礼子. 1990.『英語の語形成とその生産性』東京：リーベル出版.

Shimamura, R. 1994. "On the Notion 'Head of a Word'." In Chiba, S. et al. (eds.) *Synchronic and Diachronic Approaches to Language: A Festschrift for Toshio Nakao on the Occasion of His Sixtieth Birthday.* Tokyo: Liber Press. 287-306.

Siegel, D. 1974. *Topics in English Morphology.* Ph. D. dissertation, MIT. New York: Garland. 1979.

Spencer, A. 1991. *Morphological Theory. Oxford: Blackwell.*

Strauss, S. L. 1982. *Lexicalist Phonology of English and German.* Dordrecht: Foris.

Sweet, H. 1891. *A New English Grammar.* Part-I. Oxford: Oxford University Press.

Trommelen, M. & W. Zonneveld. 1986. "Dutch Morphology: Evidence for the Right-hand Head Rule." *Linguistic Inquiry* 17, 147-69.

Wayne, P., J. Abe, H. Horiuchi & M. Okazaki 1989. "English en: Prefix or Suffix." *English Linguistics* 6, 168-182.

Williams, E. 1981. "On the Notions 'Lexically Related' and 'Head of a Word'." *Linguistic Inquiry* 12, 245-74.